

最終回：今後の課題

これまで5回にわたって湾岸産油国に対する技術協力の実績を紹介してきた。日本の政府開発援助からの卒業を間近に控えた湾岸諸国において、今後はお互いに対等の立場に立った協力や、民間ベースの協力の促進が望まれる。また、オマナイゼーションに代表される動きのなかで、自国民の人づくりが重要な課題となっている。さらに、これからは湾岸産油国だからこそ出来ることに着目した活動を展開して行くべきであろう。

湾岸産油国はいずれも厳しい乾燥条件に立地しており、ルブアルハリの移動砂丘、サブハと呼ばれる塩類集積地帯、山岳地帯とそれに続く礫原、ナツメヤシが繁るオアシス地帯と変化に富む自然を有している。また、この地域は古くから東西交易の中心地であり、今尚アフリカ・インドとの間をダウ船が行き交っている。さらに、石油収入による豊富な資金に恵まれているだけでなく、世界でも屈指の情報先進国ともいえる。こうした産油国に特有な条件を十分に生かした活動こそが、今後の国際協力分野にも強く望まれる。つまり、変化に富む自然を有しているという条件は、世界に広く分布する様々なタイプの乾燥地に応用できる技術の開発に貢献できることを意味している。また、アフリカから西アジアにかけての周辺諸国とのつながりが強いことは、そうした国々からの情報収集や、逆にそうした国々への技術の普及にとって好適な条件となっている。こうして、豊富な資金や情報を、同じ問題を抱える周辺地域の発展に生かすことができれば、これこそが真の国際協力と言えるのではなかろうか。

こうした産油国に特有な条件を生かした活動の例として、ここでは次に示す二つの構想を提案して本シリーズの結びとしたい。

乾燥地農業技術研修センター

ここでは、周辺地域を含む乾燥地の農業開発に有用な技術の開発と各国の研究者の育成を行う。湾岸地域の変化に富む自然の中で研修が行われることにより、周辺の砂漠化に悩む国々に応用できる技術が習得できる。また、豊富な資金や情報に恵まれているため、近隣諸国からの研修生や研究者がじっくり腰を据えて研修に励むには良い環境がそろっている。乾燥地の農業開発を目的とした研修内容は多岐にわたるが、具体的な技術テーマとしては、乾燥地造林および砂丘固定、作物栽培法、塩害防止、水資源開発及び効率的な水利用、耐塩耐乾性植物の導入等々が考えられる。

乾燥地植物テーマパーク

ここでは、植物遺伝資源の収集・展示・保存、あるいは乾燥地に特有な植物資源の利用方法の実演、乾燥地の農業生産にとって有望な植物資源の検索と有用作物としての利用等に関する展示を行う。人々は長年に渡って植物資源を香料や染料あるいは薬用として、生活の中に工夫して取り入れて来た。しかしながら、近代化の波に乗って人々の生活は激しく変化しており、培われてきた伝統や文化そして生活の知恵が失われつつある。そこで、地域における伝統や文化の保全や将来における農業生産力の増強のためにも、こうした植物資源を扱うテーマパークが有用であると考えられる。